



龍登久五
前

中村俊定文庫
文庫 18
143
1



蛇乃さきこも藤乃
葉乃紅しこ物乃
はあしあへは母乃
後乃松の根乃
こくまの乃

おなまかへはひの雪の
託伝提おうあまきいお
去てみおろくやの雄略
の巻と巨の京は
一むう〜あ〜し

笑ハ能登登金お
〜

元禄十二

衣更志中

風下童
三木序

凡能諧廣事今更とを
古也れと多草木禽獸の
名を以て國々の山川を以て
入すて志を著す天地を
うつし神を以て記し予
一集おひきと名を以てん

よもぎあゝ比利乃しあゆみ
徒好んつゝあゆみのま乃日深
しあゆみ短筆のまら
小のまあつゝあゆみのま
粧はあゆみ

京凡軒

提要



丁未

君の代を梅りし雪を春乃春

京和栞園

信徳

元日や花ゆく雲を西東如泉
眼識るまゝ鞆る法師を筆男言水
我宿るまゝ蒲の心糸く縋縄我黒
若衣始あつ合たり老れ徳方山
いてやけさ能く七尾は庭電晚山



世の教中心廣く出^紅花の花の衣 級石
居^{大坂}乃香やあやめを業も白へも元安
奉の鶴も穿立る本に物とて来^{大坂}山
とく^日とやよい茶臼の親の乳 才磨
わさきに羽子板をた初^{大津}津妻 園女
あ^{七尾}あや子の且れ種中声 尚白
宮^{七尾}山や雉り合は沖を流る提安

園やふゆ中^{日橋本}汐をいよ昆布 素貞
門^{日向石}杏や六月^{日向石}下 涼 探吟
そ^{日橋本}を於神に世代^{日橋本}名^{日橋本}三^{日橋本}月^{日橋本}呉^{日橋本} 勅文
恰^{日向石}も氣を吐初川 涌 形 歸之
春^{日向石}やふ^{日向石}何^{日向石}も^{日向石}を^{日向石}取^{日向石} 記 由^{日向石}言^{日向石}
袋^{日向石}やむ^{日向石}ふ^{日向石}積^{日向石}中^{日向石}初^{日向石}り^{日向石}ほ^{日向石}子^{日向石} 寸^{日向石}ヨ
曙^{日向石}ハ先^{日向石}遠^{日向石}来^{日向石}の^{日向石}る^{日向石}さ^{日向石}小^{日向石} 約^{日向石}玄

初爰や模^ゴ追^ツあらしも富士の^{日守本}を^小程
彩^{イロ}んせよ若水^{カミ}鹽^シ 老^オは^ハい^イ系^{ケイ} 白^{ハク}望^{ボウ}
崖^{ツツ}固^コや我^ガ志^シ似^ニと^トる^ル家^カを^ヲ利^リ善^{ゼン}
是^{コト}ら^マる^ル小^コ國^{クニ}を^シ々^々知^チ乃^ハ者^{モノ} 念^{ネン}吟^{ギン}
炭^{タン}焼^{ヤク}と鬚^{ヒゲ}や利^リらん^ン々^々の^ハ名^ナ 長^{チヤウ}久^{キウ}
聖^{セイ}ひ^ヒ和^ワ川^{カハ}婆^ハ利^リ塞^{サイ}推^{ツイ}の^ハ影^{カゲ}小^コ蛇^{ヘビ}安^{アン}良^{リヤウ}
萬^{マン}葉^{エフ}や白^{ハク}髮^{ハツ}以^ヒ乃^ハ是^{コト}矣^イみ^ミ樹^{ジュ}水^{スイ}

元^{ゲン}躬^{コン}や淨^{シヤウ}衣^イを^シて^テ友^{トモ} 右^{ミダヒ} 友^{トモ} 硯^{イン}
初^{ハツ}祝^{イハヒ}日^ヒも^モあ^アら^ラる^ルと^ト吹^{フク}二^ニ百^{ヒャク}八^{ハチ}十^{ジュウ}日^{ニチ}一^{イツ} 得^{トク}
水^{スイ}に^ニ今^{イマ}躬^{コン}重^{チヤウ}頼^{ライ}や^ヤ薄^{ハク} 少^{シヤウ} 芦^{アサ} 戸^ド
猶^{ナウ}ま^マくも^モ行^{ユク}儀^ギ小^コ品^{ヒン}を^ヲけ^ケされ^レ去^ク 立^{タチ} 苑^{エン}
大^{ダイ}少^{シヤウ}や^ヤ一^{イツ}子^シ末^{マツ}座^ザハ^ハし 男^{オトコ}子^コ 考^{コウ} 説^{セツ}
有^{ユウ}職^{シヨク}の^ノ地^チ下^カに^ニ在^アり^リ々^々の^ノ者^{モノ} 次^{ツギ} 舟^{フネ}
元^{ゲン}躬^{コン}の^ノ角^{カク}丸^{マル}を^ヲ平^{ヘイ} 胡^コ座^ザ 文^{ブン} 花^カ

笑顔乃先^のく^と 欠^ヒり^ト 門^ノ 飾^ル 延^シ 沈^ム
我親を大思^ヒく^ト や今朝の^ニ 書^キ 七尾^ノ 宗^ト 加^ヘ
初^ニ 空^ノ や立^テ の^ク 去^リ 年^ト 此^レ 流^ル 雲^ト 色^ト 七^ト
里^ノ の^ニ 書^キ 義^ト 著^ル 下^ノ の^ニ 袴^ト 孔^ト 湯^ト 方^ト
羽^子 板^ヤ や^ト 糸^ト と^ト あ^ク 風^ト 以^テ 才^ト 郎^ト 弱^ト
物^ト と^ト ち^ト 新^ト 亦^ト 流^ト 進^ト て^ト 忘^レ れ^ル 多^ク 同^ト
夢^ノ の^ニ 夢^ト 代^リ 体^ト 三^ト 河^ト 陸^ト 郎^ト 中^ト 書^ト
大田氏

夢よそ^ノ 依^リ 帰^リ 教^ト 志^ト 角^ト 一^ト 列^ト
寫^ル 乃^ト 夢^ト の^ク 流^ル 三^ト 也^ト 苑^ト 在^ル 中^ト 攻^メ 之^ト
加列山中

梅 七尾 天神在御

海^ノ 入^リ 入^リ 苑^ト 具^ト 成^ル や^ト 神^ノ の^ニ 委^ト 信^ト 德^ト
花^ト 堂^ト を^ト さ^ノ の^ク 欲^ス 一^ト 神^ノ の^ニ 梅^ト 提^ト 要^ト
折^リ 委^ト よ^ト 夢^ト 乃^ト ほ^ト ま^ト 終^ト の^ニ 面^ト 疵^ト 晴^ト 山^ト
梅^ト 吟^ト く^ト 香^ト 灼^ト ハ^ト 空^ト 三^ト 色^ト 一^ト 琴^ト
全法年譜 山中

園の夜や馬引くけてむ久の巻日七 自笑
老僧や冥極の梅ををく西光寺 吟
飛梅の中より春の目れ鳥大徳寺 宗を
むめう香やるぬ自いと神の中八幡氏 元誰
何と乃梅やを竹の端山 晩山
妻り香や奥と脂の恋もめ提要

誓願寺に

紅梅とるまうカサ せぬ傘をくれ思平 買去
お妻やあカサ せぬ傘をくれ思平 買去

柳

青柳の風り我のふ記加列山 藤系 桃妖
山の井や極みむ加列山 桔槔 全
引加列山 馬士の衰む 柳系 勅文
物こ加列山 園一加列山 の柳 邪樹 水

至^レ御の栢とつふ柳を参^ハ加

山寺と云

晚鐘を音に動せぬ柳の風梳^ハ要

妙観院と云

命^ス此^{カニ}巖^{セキ}石^{イシ}辰^{ツキ}糸^{イト}柳^{ヤナギ}定^サ依^イ

花

く川花や去年の二玉乃力繩探^ハ吟

を遊毛出つらん^ハ庚^{ケイ}里^リり^リ文^{フミ}花

春^ハつ^ツ養^{ヤウ}て^テ標^{ヒラ}も^モ霞^{カスミ}ぢ^チら^ラ花^ハの^ノ風^{カゼ}柳^{ヤナギ}妖

湯^ユの^ノ花^ハ小^コ舟^{フネ}う^ウる^ル又^{マタ}星^{ホシ}乃^ノ枝^エ一^{ヒト}琴^{コト}

笠^{カサ}の^ノ弦^ヒや^ヤ一^{ヒト}皮^{クダ}よ^ヨ立^タれ^レ花^ハ蓋^{カサ}泉^{イハ}子^コ

良長一周忌

去年と云ふも小をこほる泪^{ナミダ}は^ハ名^ナ久

初^{ハツ}夜^ヨや^ヤ此^{コノ}山^{ヤマ}一^{ヒト}つ^ツ洒^シる^ルと^ト云^フ

山寺

夏名

花何^もおんうく^も空の風一ト
碎^もえや花の香^も吹乃^も立^もく^もわ^も依^も
里^もふ^も是^も并^も木^もを白^も一^も花^もの香^も一^も友^も
片^も神^も花^もり^も扱^もる^も松^も原^も小^も松^も要^も

梅 見^も遊^も遊^も花^も

游^もく石^も芽^も一^もや^も滝^もさ^もく^も如^も泉^も
以^も往^もの体^も和^も々^もり^も梅^も 山^も 三^も枝^も

日^も中^も間^も家^もを^も文^もを^も所^もら^もく^も中^も香^も
梅^も狩^もる^も乃^も心^もと^も親^も味^もを^も文^も花^も
山^もさ^もく^もな^もま^もて^も乳^もや^もつ^も餠^もの^も密^も安^も良^も
こ^も芽^も燈^もや^も梅^もさ^もく^もの^も道^も乃^も短^も友^も吹^も
自^も然^もさ^もく^も狐^も記^もさ^もく^も山^もさ^もく^も樹^も有^も
老^も猿^も乃^も己^もに^も惜^もや^も山^もさ^もく^も定^も依^も
祥^も寺^もや^も下^も戸^もの^も梅^もさ^もく^も互^も不^も利^も絶^も

よし 燈籠

坊主いふれ 昼寝をり ともさへ
花の客あり 和梅 梅は 其 梅
烟火いそぐ 辰見 山さへ 本原氏 改之

雜春

京 吾竹

ふさくに吹中 にくり 春のふ
一 い 去 い 六 祈地 為 形 原 小 同

春のぬ味か あり 寝 ころり 庭 方 山
白魚や 骨 け ぐ ぐ ぐ 鳴り 先 念 梅 儀
陽 空 乃 燃 ぐ や 塔 の 日 光 梅 柳 妖
若菜 梅 とも く や 夢 け 茶 む 雲 柳 竹
萩の 芽 ち 露 を ち ま ぬ 夕 小 路 道
魚 飛 び て 氷 小 の ち 陽 気 小 小 終
と ち ち ち 丁 先 の 柳 木 春 一 得

よきの雨子の嵐と浪波へたり 春月七
元山やまろと針に糸の音毎河一可
粥杖や花婿達の顔乃を子富和全老如る
織衣や北斗の星を在大聖氏所 良長
おろろ月柳を道より園の方を桃
月かゝる人教棄ふ腕うね友玩
芳液液やまろとけきくぬ水の泡夫聖安之

あ代や鳥れがしの移りね 安良
衣さの目おまろと福と炊燈が 良長
うろりや何るまれのあ葉麦 全
五位階にまど顔乃を陸家 楳吟
池の背よ飛んで驚ヲロく陸れ 安良
飛出る頬を泥ゴミに沈むを小谷左之
志あろりある庭ある海をい 全

くほくく田螺出掛ふ船日 陽方^上
初紅や帯に白くぬ富士のふ 提腰
片賣やこの中食乃るこ 樹水
夢園て笑乃ぬ事さるを雀水^{み列} 海帆^長
西の月ハかゝる丸の付雲雀水^紅 枝葉^紅
ちろやるれ瓜打越の里^赤 事欠^岩
雪折の竹の擲の尻を日ハ一 扉^岩

ね野や烟又さるくを雀 篋 浴舟
籠え源氏さるくくくく^{十才} 三才^才

少人追悼

借乃ぬく顔もを記籠る^{加列} 自笑^{加列}
葦草妹が犯し川伽藍の戻回
花やさるくを引あふ蓬うふ^後 方水
岩の根の穴達とくふる奇店^{ガウナ} 考取

土吹や糸ほくろそて里の垣十三の
 塵のせ乃亢生のつ冬以杖 利若
 名らん橋や人日別さ 橋糸釣玄
 木の皮とのまこと 雪家春日外新中 三枝
 繁ウツギ花々 曙白しそくの花の吹
 茶碗茶碗こゝに 竹と力に 橋の頬 且成
 懐心とら 極さ出さ けしひ糸 延沈

夏

牛鼻クサさ里乃ころまや 郭郭へ 厚紙
 ちやまや 花のまのほほく良衣
 今今のせれ 妖怪妖怪さ 時多 刺舌
 霍ホト公キスや ちと狗乃 空保 一扇
 一盃の酒や 春さるやまよと 長久
 子規ホト物キスや 了 前人前まぶら 踏音踏音

信込く烟ありと世人 杜鰲 書貞
一茶釜ふりかたり物と蒸 友成
夜ありよよ酒あり 杜宇 提要

七月

五月あや冠面ふけ 麻柱 梅傳
六月あや池の中さし 腐繩 控吟
晴日とあつらん 六月 雨 松 隆

五月あやおしりし 家守乃夢 良本
六月あや積をぬき 太平記 樹水
六月あやあつらん 酒の繁 提要

杜若

初まきさひかき 廣く かなつて 約玄
かたつて 水と回ま 遠く 表あり 文表
次も や抄巻を 行かまは 中雪

杜若何 鏡屋く 葉了 一ツ 其 排
杜若 白い 花乃 華一 忍在 投画

雜夏

夏乃 ^{アキナリ}あゝ 函あ 人 宙古 活 喚と
湖了 了川 三ぬ 比 殿の 成り 水 安良
南無 人 心乃 垢 ^{アハ}也 五香 水 ^{アハ}如 水
子 乙 女 了 脛 又 せ 深 田 川 輕 去 ^{アハ}

短衣の 月や 昼寐の 夏 花 種 芝 戸
笋 ^{タケノコ}や 月と 貫 ^{ツクヌ}く 定乃 中 奇 凡
指 ^{サシ}上る 簾の 露を 初る 事 一ト
目う けり や 面 世の 常 石 燈 籠 燈 去
将子の 袖乃 ぼろ ぼろ 珠 殺の 玉 内 伝
一枝の こと 々 葉 又 くる 葉 亦 一 琴
一代乃 念佛 也 や 人 こと 多 且 成

硯水汲きたに炭新 蓮 柳 か別山中 柳妖
芥子瘦ヤセてきくちくよみ人交路通
卵のむや炭のまれも白しろくれき 方水
まんとて又きやふ道うま 一得
暁くくぬ蓮盪人の音踏か 勅文
山標をん啼力な紀柳 系 三枝
凡の日や水のう杯つふ草乃む 安良

鳴蝶乃羽やあやうき 松此脂ヤニを排
去凡をん音を清くくら蟬の巻政之
堂を十あも動く気色や輝の空晴ふ
あねの中にあまのうらびや若の緑ぬえ
かえししやぬきくも動く地の衣定依
権子やる石の中いりる入を 枝葉
なすこやんよ 龍もいとけし 近世

白るや又塵ちり下り乃西風黄きの
菊きくのころおりき日如ごとく梅うめ候

旅人の人

夏草や吐ヒキ絲いと口乃薄うすき終はつ自みづか笑
夜よ半はんやいつくを分わかる麻あし草くさ本もと同
夕ゆふ朝あさや思おもふ小家の窓のそと長なが久
夕ゆふ方の花はな又また言こと限かぎ者ものなる者もの凡たゞ

夕ゆふ朝あさやあふそは豫あきの息いき亦また自みづか笑
あひ寝ねやあ鶏けいの起おき以い屏びんを門かど一ひと得とく
ううるこ瓜うり鶏けいのせせころる涼すずきを全ぜん
汝な候うのううや又また漬ひる暑あつれれ似に猿さる
海うみ士しの家いへそれで思おもう夕ゆふ涼すず自みづか笑
竹たけ爐いろ乃の秋あき立たをよむ涼すずきを柳やなぎ妖あや
湯ゆ屋やあきこひつけたりなり七なな日ひ行ゆ芝あし戸ど

嗚るに花のうそなれば子小月
 交星や常乃水鶴も一かゝり一琴
 夕立や晴るあつと一星塚泉子
 夕立はさそ山人の汗拭一友
 涼さや古怪子も糺乃うら方水
 昼の故もうくれ下や煤う壁湯方
 行人の甚彩志さふ若う非与列淨帆

予友大田中書ハ凡怪子志深く
 象深又科の月を目に飽それ
 たり富士深えて来んといひ一終ま
 むさう野う露と故をけ

追悼

身を富士に燃くくへの夏燈小提安
 美久の白怪子えん哀あり安良

思父追悼

昼る人や人の世をきく昼の程提安
 提子や身もくらく泣寐入り久花

菊池氏の意文追悼

幾年^{ミト子}う傳ふやきし扇乃子映山
餘いまでもおあり人の名のこゝろ素貞
寂^いせり近佛や雲の峯勅文
晴天よ白雲又よ秋暑さうな方山
あるぼくの才位と挑^{ツル}あつて裁小程
日思^いせぬ昼うやの盛りよ宗を

夏のおや石何抱く一森へり安く
うし^く杯の傍に休むる扇^はな^に業久^に
二月にありおせまや夏木立^はゆ^え
いざおを湯白涼^き夕尺舞^を排
何^もも夏の一^はお^の籠^は汗^は晴^は
裸^は身^のの^とい^は是非^をき^は思^はか^は友^は双
ま^あつ^らう^う萍^はう^づく^く泥^は龜^はか^は念^は

鬼乃腕^{ウデ}ちききくや紙幟^{シウ}与一
日渡^{ヒワタリ}の夜^ヨ吹^{フク}萩^{ハギ}の餘^{ヨリ}情^{ナリ}不^レ純^{ジュン}系^{ケイ}
扱^{マキ}よや新^ニ男^ヲもくさ^レ花^{ハナ}押^{オシ}不^レ文^{ブン}花^{ハナ}
碓^{ウシ}子^コ乃^ノ傍^{ナリ}子^コにとく^ル筆^{ヒツ}不^レ小^コ松^{マツ}
垣^ケの目^メもま^ま作^{サス}の目^メも子^コ男^ヲ为^レ刈^カ
とり糸^{イト}もも^も足^{タラシ}圓^{マダラ}乃^ノ傍^{ナリ}乃^ノ長^{ナガ}久^ク

秋

星^{ホシ}じふふよ^よい志^シかあ^あいよ^よか^かれ月^{ツキ} 徹^{トク}士^シ
涼^{スズシ}昔^{ムカシ}ハ^ハい^いれ^れる^る夜^ヨの^ノ流^{ナリ}河^カ 提^チ要^{ヤウ}
笨^{イヒ}の^ノ系^{ケイ}不^レ碓^{ウシ}碓^{ウシ}の^ノち^チめ^メる^る夕^{ユフ}不^レ全^{ゼン}
ち^チう^ウほ^ホく^ク走^{ハシ}る^る海^{ウミ}乃^ノ女^メセ^セ夕^{ユフ}一^{イチ}得^{トク}
織^{オリ}女^メの^ノ車^{クルマ}あ^あら^らひ^ひり^り骨^{ハネ}乃^ノ由^ユ安^{ヤス}良^ラ
多^タく^クほ^ホく^ク桐^{トウ}の^ノ葉^ハを^ヲ碓^{ウシ}碓^{ウシ}乃^ノ交^{カウ}友^{ユウ}

秋や今秋指原の水神良書
袂箱の香ももたふりくは目
猶葉や下り光る露乃玉方水
いふつまや穢おとこは女邊り枝葉
猶葉に文よむふりくは探吟
猶葉に文よむふりくは探吟
女帝花桔枝の盤り盆三日提要

山麓にまうきても秋の戦外地
虫の音れ息續もやま物ゆ介安之
白露の音んづり系腐梅樓
白露乃まうて露り芭蕉葉文花
あふ露に我鳥うつ月夜小三枝
冷虫よる子れあはれ綾々色安良
丸ち多尾花や招く志野補回

醉カウロキよ夢を説きく庭の隅ニテ提要
うろき水かゞくの宿り比釣玄

月

名月や乞食の家お娘ウツあり信徳

とのおいぬはひく

名月や人もさうく空ウツ貝提要

名月や井戸に梅お鬼瓦充権

旅行

名月ウツの態を紫乃編戸か自笑

名月や足をもやあし橋た及ウツの列

名月やをウツのころ純ぶ人の良勸文

名月や船ウツも歌乃在ウツ下ウツ一扇

名月ウツの互ウツのま双ウツ落ウツ水ウツ好ウツ

名月やちウツの心ウツ頂ウツ骨ウツ文ウツ花ウツ

井の水乃久^ハ又^ハ流る月夜^ハ泉子^ハ
名月や一葉くの杏中^ハ露三枝
名月や幸鶴を^ハさきこ^ハ小籠
秋風や吹去^ハける客の月 桃妖
月ハそのい^ハく^ハ声^ハを^ハた^ハ音^ハが^ハ長^ハ久
大田の牧^ハ杖^ハを^ハ一^ハき^ハ月^ハ又^ハは^ハ江^ハ名^ハ
物田の橋^ハ月^ハや^ハな^ハま^ハて^ハ山^ハ奥^ハ長^ハ久

港^ハや^ハ月^ハと^ハ漕^ハ出^ハた^ハ矢^ハの^ハ轆^ハ取^ハ之^ハ
さ^ハ波^ハの^ハま^ハら^ハき^ハ赤^ハ一^ハこ^ハの^ハ月^ハそ^ハ排
小^ハ回^ハの^ハ暑^ハい^ハん^ハせ^ハよ^ハ後^ハ乃^ハ月^ハ樹^ハあり
右^ハの^ハ者^ハれ^ハ一^ハ所^ハを^ハ一^ハ後^ハの^ハ月^ハ業^ハ貞^ハ
月^ハ白^ハく^ハ酒^ハも^ハ者^ハを^ハ入^ハも^ハ有^ハ友^ハ交^ハ
柵^ハの^ハ尾^ハや^ハ泣^ハこ^ハえ^ハと^ハら^ハぬ^ハ秋^ハの^ハ月^ハ方^ハ山

小樽山あり後の月と見れよあ
一葉の探歌 井 貞

歌花

燈乃花もさうし月乃あ路通

歌花

人魚入月入ふ魚の海根は提婆

歌花

捨遊いそ月入むあそん宿り外帰之

余略

はが親虎の系とる山とむく
併それれしはとけあき

月の海や式類の差れおとり提婆

悲儀急盡する師の一周云

紫よ月物さうし我らん全

北野在納

梅咲く茶の残多き茶林藤か因

石葉むの名や私よ赤和ニキテ帯日

余畧之

右の手に碓やうした小姑利普
侍は何も指をた踊りうな樹あり
荒山やたうりて登る草うら全
うつあひて笠の指をとる尾をが小種
うらを又葦に回せん花野外草貞
あ後家の命をとり結のくれ全

鶴飛に鶴立ちうぬふ野分は利普
うさやふ安うまう種立回娘良長
あふうい仙家よ入う梅をうう回

兎の追悼

朝うやいまう開くぬ日乃別力候
能く小男啼かむさあうか提要
盗人の古水流系掃衣か三枝

侍立や砧ツチノハ乃の部べにこゝろ一ひと陽方やうほう
夕ゆふととかかくく搗衣うらい又また夜よ入いりこゝろ自みづか笑かみ
早はや飛と脚あしいついつ是こゝろはは刻ときハは梅うめををししきき陽方やうほう
ささむむ鉦かね乃の荅こたへりりままりり流ながれれ奉ほう加か
志し方かもも積つくく小こ鳥とつつととららしし道みちハハ全ぜん
けけ唄うたににああいい見みええりり鶴つる乃の夜よ又また花はな
月つき也なりをを暮くののここししとととと月つきハハ宗むねをを

六十余を又れあり 秋中候立之
片かた提たハハ玉たまををああ乃の家いえハハ砧つちのううをを中なか鳥と
通と路ろのの山やま乃の角かく足あし上かみ孕うら鹿かのの列り

山家おきて

猶なほ食たやや主しゅややいいうう鹿かのの声こゑ提た要い
夢ゆめのの海うみ鋪ふ醒さるる日ひ乃の梅うめ乃の夜よ又また
小こ満まんやや波なみ乃の消き行ゆ乃の色いろ乃の好この

落してそとる士ゆるささる花整花七改之
口をこれる人よそくむ 枯のくれ 岡野
不影吹松の風なり 秋乃くれ 約玄
花と実乃二度の桃をえ女れ 寸ヨ
冬瓜の枯 けも記 古りうま 可吟
梓園隣 ちりや 枯えくれ 梅傳
あゝ恋 一 岡のやうふる小松 礎 念吟

冬瓜 瓜乃カレ 茅カヤ屋 くれ 且如
奥階 一 綿のちる 花カ草 かつら 長久
夕の道や道とせしむ 枯梅のる 良勇
根とまきうこ 必乃富士の 女ツツカツラ 麓 吹山

冬

木くじや堂をのそけい又大なる 一方山
木くじカシキヌ小慎憚 字の 小松が 泉子

風や置とれらふ猿乃色一琴
 本枯を風情をのこけ柳少の吟
白居易の三十州に名をこぼすと
知下官の句と小名をさるるをうた
 こがしよらふ人のこころは捉あ
 本よりや衾乃やあき茂下一得
 富士の峯はくわつむはるが同
キボウシユ
 護朽り傘持流る時風が文表

知くくとあ庭白一縁の獲又花
 茶漬やうつに急乃任所梅備
 水仙やいつの芥人此塚の草捉あ
 水仙の花乃白くや雪れ曝帰之
 水仙をよせく撫く山一つ政く
ユル
 一星日の後りともきく枯聲心素欠
サシ
 猿り頬少くせさるはあが同

夕去これい川と浪の^限後乃青採^抄以

芭蕉翁追善

塚形又あり種や残^れけさの^お排妹
葛拵くもさうに^りぬ石佛三枝
打波にぬきぬ千智乃^キ機^ミ鴉^カが一友
柝や^あふり^り勢^せに^に花^はの^はと^と安^あ良^ら
十月の地^ちに^に死^しなり^り絆^はの^はあ^あま^ま具^具排

海山を^とふ^ふら^ら淋^し神^{しん}を^を月^{げつ}枝^{えだ}棠^{たう}
夕^{ゆふ}の^のや^や鴨^鴨乃^乃月^月抱^{かか}鈴^{すず}の^の海^{うみ}約^{やく}玄^{げん}

入湯

山中の^{ちゆう}つ^つま^ま枯^こる^る湯^ゆの^の白^{しろ}じ^じ良^ら長^{ちやう}
族^{しゆ}の^の人^{ひと}あ^あを^をう^うつ^つに^に安^あら^らか^か安^あ之^し
る^る杭^かも^も甚^しる^る柝^たの^の勢^せあ^あら^らか^か探^{たん}吟^{ぎん}
新^{しん}の^のあ^あや^や崎^{さき}なる^る冬^{ふゆ}の^の海^{うみ}内^{うち}候^{こう}

ら張の月のことれとらや 源氏の冬 海之
冬乃月や像ついでに何そが有ふと 浮舟
旋子の尾よ鶴乃ふむ 枯葉の 其柳
朝の日のともや 暮るる 新河舟 所真
槌乃これ一はたきき 志くれが 名好
和言や僕ボクり新夜と 悪くは 利善
りトとら中より 音吹ハ 元雄

河多成 動出た 岸の小鴨 三枝
破こ鏡や 音字 悪凡 小夜 何多 同
梅サホあき 船を せきる ありは 也 次
物系 やり 名をつく 鶴を 来 全
又サヒ寂く 鞠の 教と 新夜 音 小程
時多て 浮舟 ありと 成 本 義 あり 白後石
柴人の 山 孤く ともや 音 け 雪うしろ 一 琴

初雪や上手に擽る 壺の枝の内側
炉もくまの明日つらん 嵐元亮 雄
炉中やまゝ寝ぬ先は 夏だき 如も
青磁のよりむく方や 初お見これ 為 駆
山灰焼いり見らん 冬の雪水種
雪念佛 夏もや 春もも 個方
雪を半吹切あり 芝戸

初雪や蹄を一繩子 自笑
煖拵一垣 露ぬる 寒きか 陽方
背立く 崎や 筑出 初 録 友 硯
夕日 顔丸雪や 太下ふ 漆二つあ良
辛崎や 水の 庭も 雪乃 松 冨雪
吹雪花や 一夜も 春も 新 担 業 貞
初雪や 石 初は 枝むく 樹 あり

抱衾の米乃アミヨ 香乃彩 自災
香小乳 徳や本船コノネ一そ云 長久

安宅園アサキ

香簾ミやまの香中と打つ此 喚山
おもえともいもん 巾の衣ハ 宗世
息アセや二つをニ名ナいイまマさサいイし 利リ継ツ
えおろせいと 盤イをウ一 三保ミツノの松 野ノを

初香の先走りなり 鯨クジラ 鱈ダウ 一扇

初香一葉ハさサしシやえエぬヌ大所オホ講コウ考コウ玩ワン

立石の角ツはハ泥ドロりリ玉タマありリ被カ同

山ヤマ未ミ鳴ナりリ松マツ百ヒャクの橋ハシ乃ナ香カれレ政セイ之

玉タマ粉コさサせセ指サれレ竹タケありリ香カむム如ニ泉

香カ回クワや牛ウシの角ツノ小コをヲ葉ハ取リ中ナカ投ナ要

葉ハ多タ香カ挿カサとト香カ垂シれレ種タネ葉ハ分ワ令レ吹

山彦や抱よおし 音乃猿旦成
小刀や古押の望む燦掃ハヤ室治
恋しくもなきて寝るきぬ時 晴山
古大根も候くむる草草 木喜
身の果も角生こを奉のくれ 排妖
月額やと月おひさむの善友志
縄帯も縋子を月位しのくれ 故之

せりこも金小いあり下年の善 良勇
一年乃放下又えさる 師走系 其角
字の紙はあり中念仏やとのくま 白伝

信徳翁追善

朝やおやうきなるおある 蛇乃上躰京白梅園 水
そと 蛇心 捲ふやと所日抗流軒 洞 水
柳乃葉も茂て淋日春秋子 燕 睡

一歩踏出たなりしては先生を急ぐと
その一にもやあふぬふとやてかぬけく

草葉ももろちひき弦へ遊月投あ

馬癖あり財癖あり枯癖あり
投あふ犯句の癖あるをよとゆ
先師梨柳園の主人もあましく
られし能也茶の枯れ彼島折乃山
川みはしと花表乃風柱と接るあり

花鳥に接形をいあり茶の湯登踏水

焼飯をなぬ樽あ乃箱い言水

道 牛乳東衣く行

比をうし風そをみらに麻衣投あ

その月猿の念切氷く那回

煉掃やあまうぬ艶男回

跋

久元津より珠洲まで一
國の海をよみ集る所原不
あるは皆此の意也一も
もこれ親をれ七尾の提安と云
そ礼を懐めく都のあり
誰と諷る彼と諾ウツクをくくもし

のこ

七

席の塵はとれぬをとり拾ひよせ
流し掃ぬ所を名ぞく枯れを全と
見事な之口ゆりや一聞よ平を
〜 心遠のまゝに人取まゝよ
よのな〜

之旅十一已中表下旬

立〜病

方山家



